

夏目漱石

文学評論

第一編 序言

文
学
评
论

第一編 序言

専門の知識——十八世紀という語——文学史は科学
か——科学と文学——文学についての一のコンフュ
ージョン（混雑）——鑑賞的態度と批評的態度——
単なる鑑賞的態度の不備——鑑賞的情緒の分解——
『ハムレット』の例——批評的鑑賞の態度——三態
度の比較——二個以上の作物に対しての三態度——

文学史に対しての三様の態度——文学の批評家および文学史家は科学的態度を除却すること能わず——今日までの批評家および史家の欠点——余の態度——請売りの批評について——偶然の暗合と必然の暗合——趣味の普遍性について——その二種——ダ|ンテとヴァー|ジルの例——『ブラツク・チユーリツプ』と『ユヌ・ヴィー』の例——複雑になる結果——普遍を離るる結果——言語——その濃淡と調子——これか呑み込まざる弊——わが標準を捨てること——吾人が批評的鑑賞の態度をもって外国文学に

対する二法——第一法——ポープおよび『オシアン』
の例——第二法

今年は英文学史の十八世紀だけを講義するつもりであるが、講義を始めるまえにちよつとお断りをしておかねばならぬことがある。元来一世紀の文学と題するような大問題を捉えて論ずるにはこの問題をいかに取り扱うかという覚悟がなければできなのである。しかしこの覚悟ができるにはそれ相応の準備がなくてはならぬ。単に空想や空理で文学史を組織するわけにゆかぬのはむろんのことであつて、まず研究の手始めとして批評なら批評、

比較なら比較、または叙述なら叙述、いずれにしても十分な材料を貯蓄して懸らねばならぬ。さてこの材料と申すちよつと一口にいえるようであるが、決してそんなに容易に手に入れたり、または纏めたりすることのできるものではない。すでに収集せられたるものをひととおり目を通すことすらたいへんな難事である。目を通したうえにこれを自己の見識で論断するというのはなおさらの難事である。あの人はチョーサー (Chaucer) の専門家であるとか、またはシエクスピアー (Shakespeare) 学者であるとか一人の文学者を生涯研究しても、十分研究

の余地はあるくらいであるのに、百年間に出た数十ないし数百の文学者を捉え来りてきた 掌たなごころ を指すがごとく論じ去ろうというのは並大抵のことではない。西洋の学者でも自己のもっぱら修めている時期以外に涉ると普通の人が読んでいる書籍すら目を通しておらんことがよくある。いわんや余のごとき日本人、しかも十八世紀文学を専門にしたというほどの勉強も積んでおらぬ余のごとき者がこの世紀の文学を論じようとするのはずいぶん無理なことである。諸君の前でこれから十八世紀の文学を講義しますというまでには少くとも二三年準備をして読ん

でおらぬ書物も読み、または読んだ書物も今一度読み直さなくてはならん。しかしこの六月に学年が了えるところの九月から急に新らしい講義をしなければならん。したがって思うように準備もできにくい、自分の力量で自分の考案でこの講義をひととおり満足のゆくように纏めるわけにゆかぬ。だからこの講義はずいぶん不完全なものである。他人以外に一機軸を出した組織批評等はできそうにもない。自分も大いに不愉快を感じるわけである。

次には十八世紀文学とか十九世紀文学とかいうのは通俗の語であって事実上意義のないことであるということ

をちよつとお断りをしておく。歴史はそれからそれへと繋がって進行してゆくものであるから文学の発達とか變化とかいうものは自然天然のもので、昨日きのうと今日とのあいだに截然たる区別がつけられぬごとく十八世紀も十八世紀で独立したものでなく、前後と区別ができぬように密接している。十八世紀はしぜんと十七世紀から流れ出してまたしぜんと十九世紀に注ぎ込む。したがってどこからが十八世紀で、どこからが十九世紀か分らない。これ等の名は単に器械的の名で、その器械的の名をもって人工的に十八世紀と区別したからとて、その名の示して

いる十八世紀中に内容として現われてくる文学は決して人工的に前後と切り放つわけにはまいらん。しかるに人が十八世紀文学などと唱え来つたのは単に約束的便宜的のものであつて実際は不都合である。少くとも哲学的でない。科学的でない。ゆえに十八世紀文学といふところなものであると一口にいうことは誰もできないのである。しかし便宜上こんなものだといいたがるのが人間であるから、已むを得ずこの器械的の名の裏にある複雑なる文学的現象を曖昧のあいだに概括して、一種の特色があるものと見^み做^なして、冠するに十八世紀文学の名をもつ

てするのである。

さて十八世紀とはいうまでもなく百年間のことである。百年間の事実を一年目から百年目まであとづけてゆくと上から下へ貫いた記載ができる。すなわち十八世紀文学はこの点からいふと歴史である。文学史の一部である。すでにこの講義は歴史である以上は、少くとも歴史として見得る以上はこの講義を始めるまえにいま一つ断っておかねばならぬことがある。歴史というものは文学であるかまたは科学であるかというとむろん歴史の解釈次第でどちらにもなるのであろうけれども、また昔から

の歴史を読んでみると双方の分子が混入しているようであるけれども、社会の現象を分析してみたり、総合してみたり、錯雑なるものを明瞭にすることを力めてみたり、原因結果の関係を見出すことに骨を折る点からいえばむしろ科学であろう。たとえ在来の歴史ではニュートンの引力の法則のような大いなる原則は人事上において発見せられなかったかもしれず、また向後もかくのごとき精確な原理は発見する見込がないとしても、その研究の方向および力を費やす方向は科学的といつて差支はなからう。さて文学史も史と名づける以上はむしろ歴史の一部

でなくてはならぬ。それで歴史が科学的なものであるとすると文学史もまた科学的なものでなくてはならぬ。しかし名前は文学史で史の字が付くが、ほかの歴史と違って材料が文学であるから、科学的ではない、やはり文学的なものであるという人がないともいえぬ。少くとも科学的にする必要はないという意見を持っている人がないとも限らぬ。あるいは性質上からいえば科学的のものであるけれども、材料が文学という科学的に論断しにくいものであるから、そんなに厳密に科学的にはとうてい組織できんと思う人もあるかもしれぬ。したがってこの問

題について一言しておきたい。

普通の習慣として吾人は文学と科学とを対立相反の言語 (opposite terms) として用いる。そしてこれを吾人の心的活動力の二大流派のごとく考えている。すなわち吾人の知的活動と情的活動はほかに発してこの二つの潮流となるものと思う。もちろん精密に論じだせば際限がない。故意に両者の類似したところばかり挙げてかかれば思いも寄らぬところに密接な関係が伏在しているだろう、また面白い研究も新らしくできるだろうが、まあ通俗の見解によると、この区別はだいたいのうえにおいて

何人も異議なきものと認められている。それで差支ない。この講義のこの節においてはそれ以上の知識も研究も不要なのである。ただこの通俗の見解をいつそう適切と思わせるために、一応簡単に科学者の遣口を、諸君の記憶中に新たにしておくほうがむしろ必要である。その道の人は科学をこう解釈する。科学はいかにしてということすなわち **How** ということを研究するもので、なにゆえということすなわち **Why** ということの質問には応じかねるというのである。たとえばここに花が落ちて実を結ぶという現象があるとすると、科学はこの問題に対して、

いかなる過程プロセスで花が落ちてまたいかなる過程で実を結ぶかという手続を一々に記述してゆく。しかしなにゆえ、(Why) に花が落ちて実を結ぶかという(しかならざるべからずという)、問題は棄てて顧みないのである。ひとたびなにゆえにという問題に接すると神の御思召であるとか、樹木がそうしたのか、人間がしかせしめたのだとかいわれる Will すなわちある一種の意志というものを持てこなければ説明がつかぬ。科学者の見た自然の法則はただそのままの法則である。これを支配するに神があつてこの神の御思召どおりに天地が進行す

るとかなんとかいいうなにゆえ問題は科学者の関係せぬところである。だからいたって淡泊な考かんがえで研究に取りかかるといっても宜しい。

さてこのいかにしてすなわち How ということを解釈すると俗にいう原因結果という答が出てくる。しかしまえに述べたような訳だからこの原因結果とはある現象の前には必ずある現象があり、またある現象の後には必ずある現象が従うという意味で、甲が乙をしかならしめたなどという意味ではないのはむろんである。それでこの原因結果を探るには分解をする。一の現象をとって

「いかにして」ということを究めるには、それが複雑な現象であればあるほど「いかにして」ということを知りにくい。知ったと思っても分解を経たうえでないと常に間違う。だから人間はその場合とその時代に応じてでき得るかぎりの分解を企てる。分解をしてある微細なことについて「いかにして」ということが分ると、次にはこの零細なる事実をたくさん集めて比較してみる。そこで総合、ということが始まる。総合とは同じような事実をたくさん集めて「いかにして」という点において皆一致していることを見ることである。で総合ができれば、これ

から一の法則ができるわけである。それから総合をしてみて「いかにして」という点においていろいろな場合が一致しなければ分類、ということができる。まずざつとこんなふうで科学はできる。つまり科学は誰でも知るごとく知的作用で、その要は宇宙の現象について吾人が明瞭なる見解を持って生存上の便宜を得んと欲する希望から起ったものである。しかるにこの明瞭というのが五感に訴えて明瞭ならぬものまでをも明瞭に頭脳で解るようにするからして、したがって多くの現象をできるだけ部属メンバーに類レデュー別して漸々抽象的なものにしてしまう。

エキスプレッション

科学がこんなものである以上は、吾人の感情の
 発 顕 と見倣されている文学、また吾人の感情を動
 かすための道具と考えられている文学が科学とだいたい
 のうえにおいて趣を異にしているのはもちろんのこと
 ある。ただしこの区別を詳細に論ずると、先刻お話し
 するような複雑な問題に陥りもしようし、そのうえ前年述
 べた講義「文学論」と重複することもあるだろうから、無
 益な繰返しや、不必要な新研究はやめて、諸君もやはり
 流俗と同じく文学と科学を対立相反の語として使用する
 ことを黙認せられたるものと見倣して、進行する。

この区別が普通の人の脳中にあるため文学について一コンヒュージョンの混雑コンヒュージョンが起っているように思う。余がちよつと論じておきたいと申したのはこの混雑についてである。すなわち文学が科学と根本的に異なるものであるから文学の批評および文学の歴史までも科学とは異なるものであると、文学という字に拘泥してすべて文学に関係のあるものは皆科学とは独立したもののように思うことである。これは誤解であるからしてこの誤解を正さねばならない。文学という定義はともかくも、文学とはなんだといわれた時はすなわち文学上の製作物、作品そのものを指すに違

いなかろう。そこでなるほど作品を作り上げる手^{プロセス}続か
らいえば前いうとおり科学とは別物の（だいたいのうえ
でいう）に相違ない。しかし文学上の作物それ自身とそ
の作物の歴史または批評ということとはむろん同一でな
い。歴史とか批評とかなるとこの作品（すでにでき上つ
た）についての吾人の態度を意味するので、今までのよ
うに自分が製造する見地、すなわち詩歌文章を組織する
という点から論ずるのではなくって、これを客観的に
研究の材料として取扱うのである。こうなると吾人の態
度はあたかも科学者が自然の現象を前に置^{おい}てそれを材料

として研究しはじめると同じことになる。すなわち文学上の作品は一種の現象として見らるるのだから、みずから作るときは態度において主客の差がむろんある。

これだけではまだ尽せたい。なるほど自己が述作をやる場合と他の作を材料として取扱うとは主客の差はあるが、この材料として取扱う場合または現象として見る場合でも決して十人が十人ながら同じ態度で向うものではない。この態度を区別していったならばまえに述べた混雑も解釈ができるだろうし、また文学史のやり方も判然してくるだろうと思う。

吾人が外物に対する態度は大別して二となすことを得る。一は自己の好尚をもつてこれに対するもの、すなわちあるものを見るのに面白いとか詰らないとかいう態度である。しばらくこれを称して鑑賞的 (appreciative) といっておこう。他の一つは自己の好尚があるないにかかわらずしてそのものの構造、組織、形状等を知るための態度で、すこぶる冷静なるものである。しばらくこれを称して非鑑賞的 (non-appreciative) または批評的 (critical) といっておこう。そこで今吾人が文学上の作物を読むと仮定する。すると文学というものは製作上か

らいうと、自己の情感エモーションの発現エキスプレッションであつて、読者か

らいえば著者の情感を伝えられまたは読者一流の感情を起させるものであるからして、この点からいうと吾人が詩歌文章に対する態度はアア面白かつたとか、アア詰らなかつたとかいう感じを起してしまえばそれで済むわけである。したがつてこの態度は鑑賞的になる。この点からいえば読者と作者とのあいだの心の状態においてべつだん變つたこともない。したがつて読者の態度と作者の態度とを混同しても大した害はないわけである。しかしいかに感情を起すための作物でもこれに対して感情を起

さなくてはならんという訳はないし、また感情が起るにしてもその感情を引き抜いて単に他の態度でもってこれに臨むこともできるわけである。たとえば医者^イが職業上病人の糞便の検査をするようなもので、この時彼は好悪という念を脱却して単に別の方面からしてこの糞便に対して^イしている。また教師が学校の試験で成績を調べるようなもので、生徒に対しての好悪の念は引き抜いて答案紙に^イ対している。こうなるとこの態度は非鑑賞的または批評的^イといつてよからう。しかして文学上の作品についてもまた同様の態度を取ることができる。すなわちこの詩の

韻はなんであつて、行はいくつあるというようなほうへのみ目を着けて、詩が好いとか悪いとかいうことは眼中に置かぬのである。

すでにこの二つの態度ですら第二のほうは科学的である。すなわち文学上の作物もまた科学的態度をもつてこれに臨むことができるということを示している。しかし問題はこれでは結了しない。まえに述べた鑑賞的態度と、いうものをいま少し吟味してみなければならぬ。今余が人からシエクスピヤーの『ハムレット』は如何ですと聞かれた時、面白いですと答えたらそれは余の『ハムレッ

ト』に對する鑑賞的態度を示したものである。しかし聞いた人がそれで満足するだろうか。多くの人のなかにはそれでなるほどといって歸る人もあろうが、大多数の人は決してそれだけの答では満足しない。必ず「どうして」という問題を提出するに極まっている。どうして面白いのですかと聞くに極まっている。その時余は面白いから面白いのですと答えたらばどうだろう。余はその人に対して虚言を吐いたと思わぬ。しかしその人に満足を与えたとは決して思われない。その人もまた夏目という人は『ハムレット』が面白いそうであるということだけは分るか

もしれんが、いかにして面白がっているのであるかについてには不得要領でしたがつて自分もこの点について合点が行くまい。これが余の『ハムレット』に対する批評といえるだろうかという疑問が起つてくる。なるほど余は『ハムレット』を読んで面白いと感じたに相違ない。しかしてその面白いということを人に話したに違いない。しかしながらわが感じたことを一言で人に話したというだけで、なるほどかくかくの行きさつで面白いということは毫も説明しておらん。人に説明しておらぬのみならず、自分にも説明しておらん。鑑賞的には相違ないが「い

かにして」という問題に逢著ほうちやくすると一言もない。「いかにして」という問題に逢著しなければそれまでであるが「いかにして」という問題はどこにも起ってくる。少くとも思索的な人には必ず起る。知識欲を持った人にはきつと起る。人間はいかなる点において思索的である。知識欲を持っている。だから科学がかくのごとく進歩したのである。『ハムレット』が面白かったという一事実に対しても「いかにして」という問題は起らずにはいられない。これが起る以上はただ面白かったで済ましているわけにはまいらぬ。これを説明するのは自

己に対する義務でまた問者に対する義務である。

しかし面白かったという感情はむろん無形無臭なものである。無形無臭なものを人に説明することはもとよりできる所作でない。古人の言にも水を飲んで冷暖自知すとあるとおり、感情は説明を許さぬものである。説明を許さぬものを「いかにして」という問題に引きつけて説明しようとする以上は説明しがたき無形のもものを説明し得る有形的のももので示さねばならぬ。換言すると無形のもものを有形的に引き直さなければならぬ。あたかも寒熱は一種の感覚であるのを説明するために寒暖計の度数で

示すようにしなければならぬ。しからば文学上の作品から得た感情をどうして有形的な文字もしくは記号で説明するか。これが次に起る問題である。まず吾人が作品から得た一種の感じについて第一に「いかにして」という問題を提起して考えてみるとこの感じを起したものはすなわち作品それ自身である。それだからこの無形の感じを有形的に説明するには作品そのものを挙げて示すより仕方がない。これはちよつと聞くと愚のようないわんでも分り切っていることのようにであるが、論理的な答弁に相違ない。ただ困ることは論理的であると同時に大した

満足を与えないのである。吾人はある作品を読む。次に一種の感じが起る。次にこの感について「いかにして」という問題を提出する。次に作品そのものでこの感情を説明する。論理的に説明はできたかもしれないが、いつのまにか出立したところへ舞い戻ってしまった。『ハムレット』を読めばどんな感じが起るかという時には面白かったと答え、またどうして面白かったと聞けば『ハムレット』を指して答える。これでは同じところを行ったり、来たりするだけでいっそう事件が発展しないのである。それならばどうしたらよかろう。むろんこの感情の出処

は作そのものにある以上は、また無形の感情を説明する
 に有形の文字をもつてせんとする以上は、やはり作その
 ものを離るるわけにゆかぬのは当然のことである。しか
 してその作そのものは一字でできているわけではなく字
 が連続している。しばらく『ハムレット』でいえば『ハ
 ムレット』は幕数が五つある。そのおのおのの幕が何個
 かの場シーンに分れている。その場がまたハムレットとか、
 オフエリアとか、レーアルチーズとかいう人々の科白せりふに
 分れている。それゆえに名は『ハムレット』だけれども
 その実はたいへんな多くの文字が連続した現象である。

さてこれだけの多くの文字がかかる関係に連続されなものが纏って面白いという感じが出る以上は、その感じは決して単純なものではない。すなわちこの作品に関して説明するにあたって十分分解する余地のある感情である。してみればこの感情を分解するのが説明の第一着手であろう。すなわちこの感情のうちには親の仇討ということも含まれている。失恋ということも含まれている。虐殺ということも含まれている。幽霊の出現ということも含まれている。主人公の感情ということも含まれている。哲理も含まれている。夫を殺した女が子に対して気

兼をするという事実も含まれている。罪を犯した者が倒れるという事実も含まれている。それからこれ等の諸条件が吾人の心に訴える順序、高低、排列、その他相互に待ち合つて起る関係がある。これ等の事実がある一定の形式を具えて、吾人の頭脳に映じて、それが纏まつてひとかたまり一塊となつて、吾人に面白いという感を与えるのである。してみればこの単に面白いという感情を分解すればいろいろな、かついつそう単純な感情になる。しかしてこの単純な感情はいちいちこれに当嵌る有形的な事実で説明ができる。すなわち

感情一面白い = (悽愴 + 幽憤 + 悲哀 + 等) +
 (これ等の順序、排列、強弱、
 緩急、発展、消長の具合)

事実一ハムレット = (幽霊 + ハムレットの地位
 + ハムレットとオフェリア
 の恋 + 等) + これ等の順序、
 排列、強弱、緩急、発展、
 消長の具合)

というふうには感情を分解
 すると同時にその感情を
 起す事実を分解して、両
 者相一致する対偶を作る
 ことができる。この分解
 をできるだけやればやる
 ほど説明は綿密にできる
 のである。説明ができれば
 ば自己に対する好奇心の
 要求も他人に対する好奇

心の要求も満足ができるわけである。さてこの手続を考
えてみると最初は面白かったから面白かったという感情
から出立する。この点においては鑑賞的な態度である。
しかしいったん出立した後は分解をやるのみである。と
ころがこの分解は批評的な態度ではじめてできるもので
ある。してみるとこの手続はまるで感情的ばかりではな
い。またまるで理屈的ばかりではない。すなわち双方の
混じたものである。吾人の物に対する態度の第一を鑑賞
的と名づけ、第二を批評的と名づけたが、この三は中間
にあって双方を含むものだから批評的鑑賞

(critico-appreciative) とでも名づけてよかろうと思う。

さて吾人の物に対する態度はこれだけあつて、文学上の製作に対する態度もまたこの三とおりとならねばならぬこととなる。そのなかの第一の鑑賞的という態度は古来から東西の批評家によくある。ことに漢文の評などになるとまったくこの流儀のものが多くようである。これは批評家に適すといわんよりむしろ玩味家に適する態度である。ただ他人の作を読んで楽しむという点からいえば面白くさえあればそれで十分なので、面白いという以外になんらの説明もなにも入らぬのである。けれども自

己に対する好奇の念を満足させたり、他人の趣味嗜好をいくぶんでも導いてやろうとするにはもつとも不便な、もつとも幼稚な態度である。今の世でもただ人の作を評して高雅とか蒼健とかいい放はなつてそれで立派な批評だと心得ている者がある。またそれだけで自分も満足している人もある。これ等はいかに趣味の発達した人であつても理屈は毫もいえぬ人である。したがつて批評家にはなれぬ人といわなければならぬのである。第二の態度はまるで好悪を度外に置ての態度であるからこれは純然たる科学的方法である。この方法でゆくとこれは旨くできて

いるとか下手であるとかいいうことはいつさいいわない。

ひとつ

今一の脚本を評するとすれば、その構造はかくかく、筋道はかくかく、事件の発展と性格の活動はかくかくと、褒貶せぬ いうので、自己の趣味をもってこれを上下し、ほうへん 褒貶せぬのである。これはまえのと正反対である。しかしこの態度は古来からの批評家にほとんど少ない。たまたまあると詰らない人に限るようである。また人はかかる品評を好まない。こういうふうによれば趣味がないとか分らないとかいってしまう。しかしそれは態度の異なるので、最初から趣味を交えぬ客観的の態度であるといふことを

承知しなければならん。またかかる態度は文学の作品上にあつても許すべきものであるということも承知しなければならん。いな単独なる作品に対してはとにかく、二個以上を比較するとか、前後幾多の作品を比較するとかいう点に関しては、この方法は大いにたいせつな事となることは以下に述ぶるところで明かであろう。さて第三の態度にいたつてはいわゆる在来の批評家の往々用いたる方法であつて、第一の態度に不満を感じてなんらかの発展を見出す時は必らずここに出いずるのである。されども確然とかかる態度を維持して堂々といずれの場合にも

臨むというにすこぶる困難なる話で、少々危くなると第一に逃れ込むことが多い。しかも実際感じないことでも前人の言などを繰返す場合も多くあるだろうと思われ。またいかによくこの第三の態度を取ったところで、こう口でいうようにハツキリと明瞭にできるものではない。第一感情の分解ということが非常に困難である。それから感情が分解できたとしてもこれに当嵌る事実をいちいち指摘することがすこぶるむづかしい。単に一字を見てもその一字から受ける感情をだんだん考えてみると非常な遠いところへ縁を引いて連想に連想を重ねてい

る。ちょうど薄い紙を何枚も重ねて厚紙が成り立っているような場合が多い。その紙を一枚々々元のようにはがして人に見せることが困難であるごとく、一字から出てくる感じを分解して説明するのもたいへん困難な場合がある。

そこで以上は一個の作品に対してこの三とおりの態度があるということをお話したのであるが、二個以上の作品を比較するという事になってもただ手続が複雑になるというまででこの態度に変化は来たさないのである。第一の態度でいえば、これよりこのほうが面白いとか、ま

ずいとかいえばそれで済む。第二の態度からいうとよほど面倒になる。まず二個以上の作品を陳列してこれをカテゴリーに分類して、そして双方から同じ分子を引き抜いて同じ類目のなかに入れ、また異った分子をもまたそれぞれの類目のなかに入れて、一目して両者の類似と相違とが明瞭になるようにする。どこまでも科学的なやり方である。たとえば二つの脚本を比較する時は幕割、場割等の器械的な点よりその内容に至るまでをいちいち指摘する。これは嫉妬が動機でとか、恋愛が動機であるとか、あるいはこの動機の発展はこういう彎曲線を描いている

が、こちらはこんなふうな線になるとか、またはこの主人公が各場に出て来るが、あの主人公は中途へは出ないとか、または時の統一があるとかないとか、いろいろな比較ができるのである。第三の態度になるとまず両方のどちらが好きだとか、いずれが面白いとか上手だとかいう点を感じて、しかる後に「いかにして」ということを分解してかかるのである。前段の場合において面白いと感じたのは一個の作品についてである。一個の作品について面白いとかなんとかいうのはやはり標準がなくてはいえぬ話であるが、その標準はこの場合においては批評

家の脳中に存するのみで、今まで読んで面白いと思うもの、もしくは直接に自然から面白いと感得した事実が暗に脳中で標準となつて、これに関連して眼前にある作物の面白い下らない、旨い、まずいを感じるのである。この点からいうと一個の作品に対するのも二個以上の作品に対するのも同様ではあるが、この脳中にある標準が外に現われて二個以上の作品に対すると比較がいつそう明瞭になつて、明瞭の度が多くなる。

二個以上の作品に対する態度を、時に関連して引き延ばせば文学の歴史に対する態度となる理屈である。した

がって歴史的に見たる文学に対する吾人の態度もまたこの三様となるわけである。しかるところ第一は文学史中にあらわれる作品を一個々々について面白い詰らないと
いうて読過するのみのことであるからして、この態度では文学史の講義はちよつとできないのである。世の中には趣味もある、書物もたくさん読んでいる、しかし聞いてみるとなんにもいえぬ人がある。これ等はこの態度をもつて文学書を通覧するためではあるまいか。これはむしろ創作家の態度である、創作家はこれで十分である。しかし歴史を編するとか、批評をするとかいうとこれだ

けでは要領を得ないのである。もつとも批評家と作家の区別というものはいろいろの点で異なるところがあるからして一言にして掩おおうことはとうていできんが、上に申したことはその一条件であろうと思われる。つまり作家は「いかにして」などいうことを眼中に置かなくてもできる（置いてならんというのではない）、直覚的にそれが面白いからぐんぐん書いてしまう。人が読んでもなるほど面白い。それだけで作家の能事は了えたので、「いかにして」ということになるとまったく批評家に任せてよいのである。ある人は創作に敗れた者が批評家になる

などと悪口を言うた。この言葉は今でも往々人に援用せられる。しかしながら必ずしも限らない。創作に失敗した者ばかりが批評家になるということは事実のうえにない。よしそうであるにしたところでやることが違いう以上は失敗が恥辱になるわけではない。馬に乗り損つた者ばかりが自転車に乗るといわれたとて自転車乗の面目に関することはないはずである。おのずからその呼吸が違うので人によって適不適のあるのは致し方がない。なお作家と批評家の区別について考えてみたら面白いと思うけれども、ここではそんな場合でないからこれだ

けついでに申しておく。それでまえの話に戻ってというと第一の態度はこういう有様であるからむしろ作家に近い態度で批評家の態度ではない。したがって文学を歴史的に見る態度ではない。すると残るはただ一つしかなくなる。そのなかで批評的鑑賞という態度はどこへいっても自分の好悪を離れない。なにを見ても自己の作品に対する感情から出立するのであるからその標準はいつでも己れおのにある。また現在の己れにある。この現在の嗜好上の標準でもって歴史上にあらわれた作物を批評してゆくのである。たとえば十八世紀の英詩は不自然である、気

取っている、面白くない。どこが面白くないといえばかくかくの場所と章句を挙げ、作者を引張り出して例を示してゆくのである。それから歴史的に比較的論じてゆけば甲は乙よりも不自然の度が多い、その証拠はかくかく、十八世紀の末にいたりて大いに不自然の度が減じた、その証拠はかくかくというふうのやり口である。すなわちどこへいっても自己が現在得た趣味というものが標準となつてはいり込んでくるのである。それからいま一つは純然たる批評的態度で、これは趣味のうえから出立するのではなくして、知識欲を満足するために文学を歴史

的に攷究こうきゆうするのである。すなわち文学という混雑した現象を歴史的に見てこれを明瞭に知悉ちしつし解釈しようとするのである。それゆえに十八世紀の詩に対しても自己の好き嫌いはむろん出さない。ただし物理学者が自然の現象を見るごとく好悪を度外に置いて、その特性を分解したうえで総合し、その特性はかかる事コンデイション情（社会的にせよ、政治的にせよ、または当時の人間の嗜好にせよ）から結果として出たのであるということ_を明かに知ればよいのである。またその知るということ_{について}もある人は作品からしてその作家を知ること_を力つとめ、ある人は

その作品からしてその時代を知らんと欲し、またある人は作品と他の作品との原因結果を知らんと力め、またある人は作品と作品以外の社会的状態等を結び付けて両者のあいだにある因果の理法を知らんと力むる。しかし知りたいたいということが主で、混雑したものを明かに知りたいたいというのが主で、作品が好きだとか嫌いだとかいうことは構わないのである。この態度からいうと文学は社会現象の一つであるからして歴史的にその社会的要素としての価値を論ずるのである。そこでこの二者を考えてみると、批評的鑑賞のほうは出立地は感情であるがその後

の手續は科学的である。もし手續が科学的にゆかぬと満足を与えないのだから、事実上そう旨くいった例がないにせよ、ともかく科学的であるべきはずであるといい得るだろう。それから批評的態度のほうは純科学的である。これも在来のものが科学的でないにもせよ、理想をいえば科学的でなくてはならぬのである。

これだけ話をすれば文学ということと文学の批評ということと、また文学の歴史というものについて余が最初懸念を抱いた混雑はたいがい取り除かれるだろうと思う。すなわち約言すると文学と科学は普通人間の二つの

ことな

異りたる活力の発動を意味するごとく使用されているにも関せず、文学の批評とか歴史とかいうと、人の誤解するような文学的なものでなくてやはり科学的な分子を非常に多く含んでいるのみならず、文学史のごときはまったく科学的に成立することさえできるのである。

余がなにゆえこんなことをくだくだしく論ずるかというと、よく人から「文学は科学じゃあない、科学的に文学が研究できるものか」などという言語を うけたまわ 承る ことがあるからである。これ等の人の言い草はあたかも花は科学じゃない、花は科学的に研究できるものかというに

等しい。また鳥は科学じゃない、鳥が科学的に研究できるものかというに等しい。なるほど花は科学じゃない、しかし植物学は科学である。鳥は科学じゃない、しかし動物学は科学である。文学はもとより科学じゃない、しかし文学の批評または歴史は科学である。少くとも一部分は科学的にやらなければならぬ。できるかできぬかはもちろん別問題である。

かくのごとく文学の批評とか歴史の研究とかいうものは大別すると二つになって、それをまた小別するといくつにもなるのであるから、その種類からいうてもよほど

混雑したものであつて、嚴格にいうと決して十八世紀文学などと人を驚かすような問題を担かつぎ出すわけのもではない。こんな問題を掲ほげらてこれからこれを講じますなどというのは大きな法螺ほらをこれから吹きますと断わるよ
うなもので、見方によるとちよつと滑稽なのである。実
際今までの文学の批評家とか歴史家とかいうものを見て
も、これは十分できていると思うものはいつこうないの
である。いわば覚書とか手控とかいうものを好い加減に
綴り合せたものにすぎないのである。余は世人があれで満
足し、著者もあれで満足しているのが不思議だと思ふく

らいである。第一彼等の態度からが不分明である。ある章には批評的鑑賞の態度で来るかと思うと次の章へゆくと純然たる鑑賞的なことを述べる。この章は純批評的であると思うとその次はまた批評的鑑賞に移る。つまり著者が読者に切れ切れの座談をしていると思うよりほかに仕方がない。またある人は作品からしてその人物を描き出さなければゆかぬというかと思うと、他の一人は作品から時代を推断しなければならんという。しかしてこれはいずれがよいのやら誰も説明してくれ手がない。または両方ともよいのか両方とも無理なのか説いて聞かせる

ものがない。また両方ともよいとすればその他にも文学を見る方法があるかどうかこれを説明してくれるものもない。ある本を読むとその気になり、他の本を読むとまたその気になり、この二つの本を繋ぎ合せて双方にどのくらいなレラチーブ・インポータンス关系的意味があつて、ホール・ワールド全体としてはどのくらいのものか、いっこう漠然として分らない。

すでに今までの学者の著書がかくのごとくであれば、彼等は漫然として文学を評し去るか、またはその頭脳が混雑しているので明瞭な取扱ができなかつたのに帰着するだろう。専門の大学者がすでにかかる体裁であるとす

れば、余のごとき浅学な者が論ずることの明瞭を欠き、独創を欠き、方法を欠くのは当然のことだ。と自慢するわけではないが確かにいいたくなるくらいである。したがってこれからの講義が諸君に満足を与うることができぬのはむろんのこと、余自身にも満足を与えぬということをおかねばならぬ。それも五年十年という日子があれば比較的自己に満足を与え得るような方法で取扱ってみることもできるかもしれんが、とにかく夏休が済んですぐ始めるといふ早急な場合に碌なことが書けるものではない。しからば余がこれから十八世紀文学を

論ずるにあたって取るべき態度はいかにという問題になるが、すでにこの問題に対して明かなる返事のでき得たものは古来の批評家歴史家中にあんまりないだろうと思うからして、余の態度もすこぶる曖昧である。やはり今までの人のようにある時は単なる鑑賞的となり、ある時は批評的鑑賞となり、またでき得るならば時としては純然たる批評的態度になるかもしれぬ。しかもその変化が一定の主義があつて時と場合に応じて自由に変ずるなら結構であるが、定見がないのと材料がないのとで已むを得ず変化するようになる。これもはなはだ心細いわけ

あるが今までの歴史家もやはり同様な事情から変化している、だからしてどうか御容赦に預りたい。

それから以上述べたことに関連していま一つ断っておきたいことがある。これは外国の文学史を論ずるにあたってほかの人はまだ断ったことがないだろうと思う。余は十八世紀文学を論ずるにあたって批評およびその方法において独創を要求するような研究ができないとまえに述べた。独創的な意見がなければ請売りの意見を述べなければならぬ。請売りということをまえ申したことに当て嵌めて考えると、鑑賞的な態度において請売りになる

こともできる。批評的鑑賞の態度において請売になることもできる。また批評的の態度においても請売になり得る。ほかのもので請売というのは、ただ人のいうことをみずからもいうに止るが、批評的鑑賞の態度において請売というところに矛盾が起る。なぜ矛盾になるかということ、まえ申したとおりこの態度にあつては好悪が根本になつて、それから出立して科学的手続をやつて、それでこの根本的好悪の説明をする。換言すれば己れの標準なる趣味嗜好の証拠とする。しかしてこの出立点になる趣味とか嗜好とかいうものは自己にある、しかも現在の自

己にある。これはまえもってお話したとおりである。それだから今余が十八世紀文学を講ずるにあたっていやしくもこの態度を取ると仮定すると、この仮定と同時に余は十八世紀文学を評するに余が現在の好悪を標準とするということの意味している。すでに余に一家独特の好悪の標準があつて十八世紀の文学、すなわちジョンソンでも、ポープでも、あるいはフィールディングでも、スターンでもすべての作品をこの標準に関連して批評するとなれば、これは余の批評であつて決して他人の批評ではない。余一家の批評である以上は請売りではないわけ

ある。また請売りであるという以上は余の好悪は標準でなくしてかえって他の批評家たとえばドブソンとかステイーヴンとかいう人が彼等自身の現在の趣味でもって十八世紀文学を評し去つたのを諸君に御紹介することとなる。こうすると請売にはなるが批評的鑑賞の態度とはいえないのである。批評的鑑賞かもしれんが自己の態度ではない。他人の態度を踏襲するに止るわけである。この場合においてこの矛盾を避け得るのはただひとつ一の場合がある。すなわち英国の批評家の批評的鑑賞の態度と余の態度が偶然暗合して同じような批評をなすことである。

これは事実上は請売りに違いない。すなわちかかる批評の本家は英国人である。だからその後起つて評論の筆を執る者がよし自家の見識で考え出したことにせよ、その見識がすでに他人の口から世に発表せられている以上はその人は世間に対して独創の功を要求するわけにゆかないのである。世の中から見ればやはり請売的批評である。同時に自分一個からいえば決して踏襲ではない、人真似ではない、やはり純然たる己れの批評的鑑賞の態度から出た批評である。この場合においては余の批評は請売りであつてまた同時に独創のものである。

さてこの暗合があり得るとすればここに二様の区別を立てねばならぬ。第一は偶然の暗合。例でいうと甲乙二人の男があつてその二人が蕎麦そばを食つて二人とも腹が痛くなつたというような暗合で毫ごうも相応な根拠がないのである。すでに相応な根拠のない暗合であるから、その場合はきわめて希れでなければならぬ。第二は必然的の暗合である。たとえば自分の子が死ねば甲も悲しむと同時に乙も泣くというような場合で、文学上にあつても一作品に対して欧州人も東洋人も同一に感ずるといふことがあるだろう。その感じがしぜんに一致せねばならぬ訳が

あつて一致する以上は、暗合にもせよこれは必然的な暗合であつて、まへの暗合とは大いに趣を異にしている。

しかしながらこの必然的暗合が成立し得るといふことを認識する以上は趣味の普遍性といふことを仮定せねばならぬ。趣味の普遍といふ仮定がなければ必然の暗合といふ事實があり得るといふは認識できぬわけである。それではその趣味の普遍といふことは趣味の全部に涉つて下し得る提案であるか、またはそのある部分に向つて下し得る提案であるか、または全部にも局部にも下し得べからざる誤謬ごびゆうであるかといふことを考えねばこの提案の

価値を判ずるわけにはゆかぬ。実は去年の講義においてこの普遍性に関して余の考えたことを話すつもりであったが、時間がなくて、そこまで講ずる暇がなかったのである。今この機会を利用して十分なお話をするると便利であるが、この講義は文学論でないからして、この問題を詳細に論ずる余地はないものとして、ただ一言に自分の思うことだけを述べておく。ただしはなはだ通俗のもので聞いていただくほどのものではないが、結論だけが必要なのだから、そのつもりでお聴きを願いたい。

趣味の全部に涉って普遍性があるというのは愚昧な人

の考かんがえである。少しく事實に徴してみればすぐ分ることである。早い話が都会の生活に興味を持っている人も田園の生活を面白がる人もある。それで都会を好かねばならぬという理屈もなければ田舎でなくてならぬという法則もない。雅だとか俗だとか高尚だとか下品だとかいふのは勝手次第に好き好きから下した名である。よし都会と田舎のあいだに雅俗高下の区別があるとしても事実上人間が雅なもの高いものを好むという点において一般に一致しておらぬというはたしかである。俗なものも一種の趣味で卑しいものも一種の趣味であつて、實際その卑俗

なものをすき好んでいる人がある以上は趣味の普遍性という提案は全部に涉つて成立しないのである。それでは人々の趣味は人々の趣味で二人以上の趣味はいずれの部分においても一致せぬかというところ、これも事実上容易に誤謬であるということが分る。まゑと同じく卑近な例ではあるが、たとえば鳥の囀さえずる声を聞けばたいいていの人とは一種の趣味を感ずる。鳥の声で動かぬ人でも、親が子を愛するのを見ては事実さもあるべきことと感じ、また夫婦仲の睦むつまじいいのを見てはなんとなく快よき感じを起す。これ等は古今東西とも同じことのように思われる。

ヨシこれ等が時勢の変化に従って、吾人の心を動かす強弱の度に相違を生じても、またはこれ等に対する趣味が全然普遍的でないとしても、人間の趣味はどこかに普遍的なところがなくてはならぬわけである。第一人間という点において古今東西皆一致しているではないか。男女がいつしよになるといふ点において皆一致しているではないか。女が子を産むといふ点において一致しているではないか。このくらい一致があれば、その趣味もまた全部の一致は望めぬにせよ、一部においてはどっか一致している」と予想しても、あながち臆断とはいわれまい。一

部において普遍的に相違ない以上は、その普遍的な点において、吾人の批評的鑑賞の態度は、ある作品のうえに同一の好悪的批判を下すであろう。すなわちこの点において必然的暗合は起らねばならぬわけである。

もう一つ必然的暗合を引き起すべき別種の趣味がある。これは外国文学を研究する際にあたって、普通の場合よりもいっそう重大な任務を帯びてくるたいせつな趣味である。この趣味が普遍的であるために、吾人は外国語をもって書いた書物に対しても比較的独立した判断を下して、相当の信念をもって、必然の暗合を、かえって

彼等外人に對^{むか}つて要求することができるのである。この普遍性の趣味とはほかでもない。すなわち文学書中に使用せられたる材料の継続消長から出る趣味をいうのである。まえいつた趣味は材料そのものに対して申したのであるが、今度のは材料そのものはさて置いて、材料と材料の関係案排の具合から出てくる。画を例にしてお話をしてみると、ドラクロアが、*Dante et Virgile*を描いたとする。するとダンテとヴァーヅルが船の中に立っていて、二人の姿勢やら容子^{ようす}やらがよく纏^よって見える。それから船の外の波だか炎だか分らない中にいる亡者幽霊などが

おおぜいかたまって、中心になった二人の周囲を取巻いた有様がよく調ととのつて見える。それで一目見ると、すぐにでき上った品物だ、これより以外に求めるものはない、これでたくさんだという満足な感じが起るとすれば、この画は材料の案排具合からして出てくる吾人の趣味を飽かしめたのである。そうしてこの趣味は東西の別なく通じる普遍的なものである。なぜ普遍的かといえは少し具眼の人から注意されれば、すぐ啓発を受けたような心持になるからである。もっと八釜敷やかましく反対を試みる人があるならば、その人に対して君は中心のない、もしくは散漫

にして収束しがたき、あるいは支離滅裂なる芸術的作品を喜ぶかと聞いてみれば分る。もういつそう進んで、よけいなことをむやみに書いたり、必要な事をやたらに書き残した作品を見て、満足な感じを起すかと質問してみれば分る。この問に対して肯定するようなものは一人もないはずである。ただしどこが散漫で、どこが冗漫で、どこが物足りないかは、人々によって必ずしも一致するとは限るまい。が相手が相当の修養のある人である以上は、趣味の高いものがひとたび説明の労を執りさえすれば、多くの場合において、中心からこれを屈服せしむる

ことができるから、まず例外はあるにしても、これを普遍的と名づける十分の根拠はあるとみて差支なからう。ところが今いったドラクロアの画中の幽霊のうちに、一見不愉快極まる、日本の累かさね以上のものが一人いる。仰向けになって船の下に浮いている。もし吾人がこの幽霊を見て、実に厭だ、よせば可いいのに、何ゆえあんなものを描いたか、描かんでも済みそうなものだのにと感じるを起したとすれば、これは吾人が材料そのものに対する趣味から出たものである（この種の趣味は材料の美醜に対し、善悪に対し、またその真偽と壮劣に対して起る

のはむろんであるが、一々の例は面倒だから省く。

この二鍾の趣味を文学的作物に応用して少しお話をすると、意味がいつそう明瞭になってくるだろう。たとえば今アレキサンダー・デューマの *The Black Tulip* を取ってみる。もし私が、この作は駄目だ、構造がまるで糊細工のように旨くできすぎている、巧妙かもしれないが、非常に人工的で不自然であると評したとすれば、この断案の基づく私の趣味は、作者の材料に対して起したのではない。材料の順序排列に対して起したものである。それからもしこの作物を評して、断面的性格の描写が浅薄

だ、作家の都合の好いように動いていると評したなれば、この評の出立地にある私の不満足な感じは、編中の人物すなわち材料に対する趣味から来たことになる。またモ
ーパサンの *Une Vie* を評して、中心点がない、夫婦の關係が主眼なのか、親子の情合が主眼なのか。両者が個々別々に独立して有機的に一編の作物を構成していないという非難をしたら、この非難はやはり材料そのものに対する趣味から生じたものではなくって、材料の並べ案排に対する私の趣味から生じたものである。

その他例を挙げればたくさん挙げられるだろうが、た

いてい了解になつたことと思ふからこれで廃^やめる。ただこの材料の相互的關係から生ずる趣味は比較的土地区風俗の束縛を受けぬだけ普遍的なものであつて、人によつて高下の差別はあるが種類の差別はほとんどなからうと思われるから、いかに外国に生れた日本人でも適当に発達した趣味さえ持つていれば、それが唯一の趣味なので、これを標準にして外国人にもこれを呑み込ましてなるほどと合点させることのできるものである。だから必然の暗合は愚か、まったく反対の場合においてもなおかつ我を正しとし、彼を誤まれりと断じ得る

たいせつな趣味である。

さてかかる訳で文学作品にたいしてはある点において必然的暗合が起るに相違ないが、趣味の普遍性が趣味の全部に涉っておらぬ以上は——またその普遍的な部分があまり広くない以上は——またその普遍的な点でも時代国民において強弱の程度が異なる以上は——この種の暗合がそんなにむやみに起るものでない。またそんなに深く起るとも限らない（吾人は西洋の詩において、特にこの感がある。小説などはさほどとも思わない）。そのうえにいま一つこれから生ずる暗合を障害するものがある。

それはこういうことである。文学のあるものは単純な要素から成立しているに相違ない。しかもその単純な要素から妙詩妙文ができぬとも限らぬ。しかしながら単純なるものには変化が乏しい。変化が乏しいと人が厭きるのみならず文学の材料となる社会の状態および人間の頭脳は日に増し複雑になりつつある。したがってこれ等の原因から末世の文学というものは複雑になると同時にまた根本的な普遍的な趣味を離れて変化を求めようになる。複雑になるという例を挙げていうと、たとえばこんなことである。——男女相愛するという現象は普遍的に

人の興味を惹くものである。しかしながらただ男女相愛するといふほかにいろいろな条件が加わってくる。たとえば一人の男が夫のある女を愛するとなると少々複雑になる。複雑になると同時に普遍性を失うかもしれぬ。甲の国民には夫のある女を愛するといふことが興味のある事実かもしれんが、乙の国民には有夫、という事実が気に入らないかもしれぬ。丙の国民には陳腐の極でついに文学の材料とするに堪えぬかもしれぬ。また男女相愛している時に戦争が起る。男は戦争を捨てて女といっしよにいとす。甲の時代には戦争を捨てるといふことが気

に入るかもしれぬ。また乙の時代ではそれが気に食わぬ
かもしれぬ。それがまた丙の時代では大いに珍らしいか
もしれぬ。丁の時代では尋常の事かもしれぬ。それから、
一方の変化を求めめるために普遍性から遠ざかる例をいえ
ば、ある人が電気燈の光を見て非常に感じて、この光の
なかに恋もある生命もある、すべての情感、すべての美
術はここにあるなどと欣喜きんき雀躍じやくやくして飛び回るような有
様を書いたとすれば、その意味は一般の人に通じようが
ないにきまっている。

以上の諸原因からして、趣味の普遍性によって必然の

暗合をなす場合は存外少ないのである（材料の相互的関係から出るものを別とすれば）。ことに外国の文学についての批判となるとこれ等のうえにいま一つの障害がある。すなわち言葉である。言葉という意味は日本語と英語とは構造が違うとか文法が違うとかいう意味ではない。言葉には意味の微妙あや（delicate shade of meaning）がある。また一種の調子の付着したものである。ただこれだけでは説明にならんからもつと分りやすいことを例に引いてお話をする。御承知のとおり日本に俳句という一種の文学があつて十七文字で詩形をなしている。あの

俳句で考えてみるとすぐ分る。同じ題で同じ材料で同じ配合でまるで同じ趣向でできた二つの句をとつてみると、^{ひとつ}一は大いに愉快的な感が起る場合と一はそんなに愉快的な感が起らない場合、いなむしろ忌味いやみを感ずる場合がある。よくよく調べてみるとやはりそう感ずるに相應な根拠を発見することができる。まずこれは俳句における一の事実であるとして話を進めるが、この似寄に寄りの句を髪結床の親方とか酒屋の主人とかいう普通の人が見るとその人々はその差異を全然感じておらん、双方とも同一の句だ、一様の価値があると思っっている。俳句はむろん日

本語である。日本語で書いたしかもほとんど同様の事を
書いたものに対して日本人——朝夕日本語を使い日本文
を読んでいる——日本人が見てかほど差異のある感じを
起す。それはなぜかというところは俳句というものを見て
俳句の言語を見慣れているから俳句的言語について一種
の微細な知覚を持っている。したがって俳句的言語があ
らわし得る微妙な濃淡とか調子とかいうものを甄別する^{けんべつ}
ことができるのに反して、一方はこれ等のほうに感覚が
遅鈍なのである。「明月や」といっても「明月よ」とい
ってもたいてい同じことだと思っっている。いま一つの例

を挙げると「君は美しくしい」といった人があつたところで前後の場合やらその調子でもつて真面目にも取れるし、また冷^ひやかしにもとれるし、単なるお世辞にも取れるし、また単なる冗談ともなる。忌味のあるようにもいえるし、また淡泊にもいえるわけである。なおいっそうよい例は役者なら役者がハムレットなどを演ずる際に全体インタープレテーションの解 釈 はとにかく、一部一部のところを、ここはハムレットの憂憤を示すための句として演じてみよ うと思えば憂憤を示すことができる。また彼の諧謔的態度を示すためにやって除^のけようとするればそれでもでき

る。しかも彼は本文の文句を一字も易^かえないのである。これだけの事実を推し拈^ひげて吾人が外国文学に対する時の場合を思うとよく分る。日本人は英語についてその微妙なる濃淡とか調子とかいうものを解するだけに練習が積んでおらん。したがって先方の人^いが忌味^{みやみ}な言い回し方だと思^ひうものも忌味には聞えないこともあろう。縹^{ひょう}渺^{びょう}たる神韻のある言語も平凡だと思^ひって読み過^すしてしま^うこともあ^るだ^らう。すべてこれ等の点になると日本人の感覚はよほど遅鈍であるにきま^まっている。英国の学者ほど鋭敏でないに相違ない。これから一つの弊^{へい}が起^おる。な

にしろ英国でできたものを英国人が評するとなると本家本元の製造品を本家本元で批評するのだから確かに相違なしという感が日本人の胸のうちにある。日本の文学を評するならともかくも英国の文学を評するのは英国人のいうほうが間違はないという考になる。あたかも素人が呉服の価値を解せぬため呉服店の番頭のいうことを一も二もなく信ずるがごとき観がある。

これは疑もなく言語の相違という点から来る。言語がすでに異様である。なんだか思い切ったことをする気にならん。なんとなく薄気味が悪い。たとえ気味が悪くな

らんまでが、手の付けようがない気がする。なんだか紗を隔てて人を看るがごとく判然しない。判然としなにからして自己の感じを標準として批評するのが剣呑けんおんのように思われる。感じがあればまだしもであるが頭で感じが乗てこない。したがって自分より判然と分る人、明確に見得る人の説を真実まことと受けたくなる。判然と分る人、明確に見得る人が必ず判然に感じ得る人、明確に感じ得る人であるという結論が出るはずはないのであるが、たいていの人はこの誤まった結論を暗々裏に下してしまう。この言語の相違から来る不便とともにいま一つの誤ま

つた結論が出てくる。それはほかでもない。つまり外国文学を評する標準は彼にあつて我にない。だから外国人の説に従わねばならぬ。外国人の説に従うとなると自分がその説をもつともと思わざることにしてのみならず、無理と思うことまでも先方の説に従うようになる。今までは自己はこの作品に対してこういうふう感じておつた、しかるに今某の批評を聞くとかくかくで自分の感じとは違つて自分には無理と思わゆるけれども、ともかくも本家本元の評家のいうことだから、自分のよりも正しい感じであるに相違ない。してみれば自分が今まで

抱いていた感じは誤った下劣な感じである。誤った感じである以上は改めねばならぬ。こういう気になる。すると人間は妙なものでいつのまにやら今までの感がなくなつて、自分の正しいと思つた感じに移つてしまふ。したがつて外国文学を研究してその批評をするとなると自分の感じはなくなつて外国の批評家の感じのみになる。なかには自分の感じが移りもせぬのに、しか感じたごとく装う者さえできる。これは吾人が外国文学を学んで陥りやすいところだと思ふ。しかもあまり無理のないところだと思ふ。しかしながらよく考えてみるとこれは趣味の

普遍という提案を全部に応用したものではありませんか。もし趣味のあらゆる部分に向て普遍なることが確言することができるものなら、かように考えても差支はないのであるが、まえに申したとおり普遍は単に趣味の一部について言い得ることであつて、もしそれ以外にこの提案の有効を主張する時は根本的の誤謬を生ずるのである。すると方今の外国文学を研究している者は言語の相違という障害物に迷わされて冥々の裏に趣味はことごとく普遍であるという無理なことを認識しているというても差支ない。

しからば吾人が批評的鑑賞の態度をもって外国文学に向う時は、いかにしたらよかろう。余はこれに二法あると思う。一は言語の障害ということに頓着せず、明瞭も不明瞭も容赦なく、西洋人の意見に合うが合うまいが、顧慮するところなく、なんでも自分がある作品に対して感じたとおりを遠慮なく分析してかかるのである。これはすこぶる大胆にして臆面のない遣り口であると同時に、自然にして正直な、いつわ詐りのない批評ができる。しかしてこの批評が時とすると外国人の批評と正反対になることがある。しかし西洋人と反対になるといふことが、

あながちに自己の浅薄ということの証明にはならない。これを浅薄と考うるのは今の世の外国文学を研究する者の一般の弊であつて、吾人は深く省みてある程度までこの弊を矯正しなくてはならん。アストンが「日本文学史」を書いてもチェンバレンが日本の文章を評してもやはり英人の見地からするのであつてこれが正当なる批評である。言語こそ違え、内容は文学である。文学という点において相違がない以上は、趣味をもつて判断すべき以上は、自己の趣味の標準を捨てて人の説に服従するという法はない。服従と同時に自己は趣味がなくなるのである。

趣味がなくなる以上は外国文学はむろんのこと、自国の文学さえ批評する資格がなくなつたものといわねばならぬ。趣味というものは一部分は普遍であるにもせよ、全体からいうと、地方的なものであるローカル（必ずしもなぜと問う必要はない、事実上そうであるから否定するわけにはゆかん）。地方的であるという意味は、その社会に固有なる歴史、社会的伝説、特別なる制度、風俗に関してでき上つたものであるということとはたしかである。すでにこれ等の原因によつて趣味を生じ、しかしてこれ等の原因は東西古今によつて異なる以上は、その異なる原因によ

りて生産せられたる趣味もしぜん異ならねばならぬ。むろん世界の交通が頻繁になつて人間相互の氣脈が漸々よく通ずるに従つてこの趣味は統一せらるる傾がある。普遍的になる傾がある。英仏独等の欧州中の各国は一般の趣味のうえにおいてすでにこの普遍力の作用を受けたものであることは疑うべからざる事実である。日本も外国と交際してからこの普遍力の作用を受けつつある。受けつつあることは決して疑うべからずだが決してその作用の一時期すら済んだとはいえぬ。少くとも今は相互のあいだに大なる溝渠こうきよが画されている。たとえば西洋で接

吻ということとは親類夫婦のあいだに面会告別の際には礼として行われる法式であつて、西洋人のこれに対する趣味もこの法式から割り出されている。しかるに日本では維新前までは女が男と同会するくらいの程度のものである。今でも男女がむやみに接吻するなどということはいくとも教育ある社会で公にすべきものではないといっている。ところが日本の新体詩人は西洋の詩から接吻という言葉を発見して一般の人の趣味の異なる日本にこの字を引入れてきて平気で使っている、しかしこの字に対する普通の人の趣味は新体詩人が用いるような意味を有してお

らん。したがって一種の忌味を感じる。嘘を吐いている
としか思われない。こんな微細な例でもよく分る。

さてその異なつた趣味の国民の製作を一種の標準に照
して評するには吾人が今まで養成せられたる趣味をもつ
てすべきはむろんの話である。接吻をもつて無邪気なも
のと考えている外国人は我々の批評を聞いて、そんな国
柄はあるかと驚ろくかもしれないが、その判断は幼稚だ
とは断言し得まい。したがって吾人は外国の文学を評す
るに吾人の標準をもつてするということに関しては十分
の理由があつて、この理由は西洋人といえども駁撃する

ばくげき

ことができんのである。もつともこの方法を濫用すると作品を熟読玩味せずして、むやみに批評するという弊が出てくるかもしれぬ。しかし現今の日本の状態ではこの弊を冒してもある程度までこの方法を用いることが必要だと思う。余のごとき者はみずから省みてかかることをなすだけの能力があるか、ないかすこぶる疑わしいけれども、もしでき得べくんば、ある場合にはこの方法をもつて進みたいと思う。たとえばポープ一派の詩のごときは当時あのくらい隆盛を極めたに關せず、現今の英人はともに同音に人工的である、自然に遠かっているといわ

ぬ者はない。すなわち現今の英人はポープ流の詩について多くの趣味を有しておらんとということが分る。しかしながら現今の英人がかくいえばとて現今の日本人にもポープの詩はしか見えねばならぬという理由は発見できぬのである。すなわちこれはまえに述べた趣味の普遍という提案を深き考もなくポープ一派の詩の全部に應用してしまつたからこんな考になつたのである。ポープの詩が十八世紀にあの勢力を得たのは明かに十八世紀の趣味に合していたということがいわれる。換言すればポープの詩は十九世紀ではとにかく、十八世紀では自然であつた

のである。さてポープは十八世紀の嗜好に投じ、十九世紀の好尚に背いたというのは歴史的事実に相違ないが、吾等日本人がポープを見る時は十八世紀の人のような感
が起るか、または十九世紀の人のような感が起るか、それは未定の問題である。または十八世紀十九世紀の人以外日本人に独特な感じが起るかもしれない。これも未定の問題である。いずれにしても読んで感じて、現今吾人が有する趣味で好悪して見なくてはなんともいえぬのである。また十八世紀の末に『オシアン』が出た。これはマクファースンの胡魔化しものだというが、とにかくこ

れが出た時は非常な評判でゲーテも愛読し、ナポレオンもした。愛読しかるに現在の英人は『オシアン』を単に歴史上の一現象として見る以外になんらの興味をも有しておらん。興味を有しておらんのみならず、とうてい読み切れないなどと特筆する評家さえある。してみると『オシアン』は出版当時の人気には合い、現今の人気にはとうてい合わぬのであるが、日本人が『オシアン』を評する時に十八世紀の人の趣味になるか、または現今の英人の趣味で読むか、これも未定の問題である。当時の人が嘖々賞賛したからといて雷同する必要もないし、また

現今の人が唾棄^{だき}して顧みぬからというてその真似をするにもあたらんのである。吾々は吾々自身の感じでもって（もし吾々自身の感さえ起るなら）これを評してしかるべきである。まえからいごとく吾人は言語の障害と一種の誤解から、こんなふう^に自己に誠実に外国文学を評しておらん。はなはだ臆病なのかまたは不熱心である。ゆえに余は諸君が外国文学を研究する際になるべく自己に誠実ならんことを希望すると同時に余もでき得るかぎりには真面目に出^いでたいと思う。しかしこれはずいぶん手間のかかることである。作品を精読してしかる後その感

を十分に分析してかからねばならぬ。したがって一二年間に十八世紀文学を駆け抜けようとしてはとうてい駄目である。そろそろ遣らなければならぬ。この点はあらかじめ断っておく。

批評的鑑賞の態度についていま一つの方法は西洋人がその自国の作品に対しての感じおよび分析を諸書からかり集めて、これを諸君の前に陳列して参考に供するのである。これは自己の感ではなく、他人の感である。他人がある文学上の作品に対する感は自己の感ではないが、自己の感を養成しもしくは比較するうえにおいて大なる

参考となる。のみならずただ知る、という点からしてすこぶる興味のあることであると思われる。すなわちある社会の状態があつてその状態からしてある作品ができ上つた。するとその社会に生存している人間がどういふふう
にこれを迎えたか、またどういふふうに感じてどういふ
ふうに分析したか。さてその所感と分析とは吾人が同作
品に対する所感と分析とどのくらい異なるか、異なる以
上は吾人の趣味と当時の人の趣味とはある点で矛盾して
おつた。その矛盾はいかなる社会的状況から出てきたか。
すべてこれ等を明瞭にするのは自己の見聞を弘めるとい

う点において大いに吾人に利益を与えるものである。同時に右の作品に対する批評が、五十年目にはかくのごとく変化したということを示すために、五十年後の批評家の説を紹介すると、五十年前の批評と五十年後の一国における趣味の差が分る。そしてその差はいかにして起つたかということが分ればまたこれを紹介する。

こうしてゆくと趣味の推移というものは、前代の趣味がしぜんに進化するものであつて、現在の趣味を生ずるに必要な条件は前代の趣味であるという事実がよく分る。したがつて前代の趣味が一樣でなければ次代の趣味

も一様でないかもしれぬということになる。してみれば日本は日本で昔から一個の趣味を有して、それが今日の趣味にしぜんに進化してきたものだから必ずしもわが邦現代の趣味が英国現代の趣味と一致するわけにゆかぬ。また一致せぬからといって恥ずべきものでない、なぞということがチラチラと分別ができるようになるかもしれぬ。するとこの方法は自己という感じがない請売りの批評的鑑賞を紹介するに止まる^{とど}ような平凡なものであるけれども、甘く^{うま}やりさえすれば実際ははなはだ興味の^よある遣り口かもしれぬ。予の浅薄なる知識の許すかぎり、

また時間の許すかぎりは、この方法も取ろうと思う。元
來人の説を聚めて紹介するのを平凡だとか才気がないと
かいうがこれは大なる誤解である。多くの書物を読んで
これをよく分るように紹介するのは一種の技能である。
これを平凡だというなら記述的科学のような単に自然の
現象を分類している者は皆同様に平凡でなければなら
ぬ。文学上の講義もやはり同じことである。平凡と思う
講義はかえって価値のある場合がある。ただし余のよう
な遣り口ではとうてい価値のある講義はできにくいか
ら、その辺もあらかじめ断っておく。

日本文学電子図書館

文学評論——第一編 序言

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第15卷」角川書店
昭和41年4月20日 5版発行

日本文学電子図書館